

第3期を刻印するという名誉を担うためには、東アジア全体を視野にいたれた比較論から日本の古代景観を意味付けることが必須の作業となるであろう。

(千田 稔)

速水 融著：

『江戸の農民生活史——宗門改帳にみる濃尾の一農村——』

日本放送出版協会 1988年7月

B6判 211ページ 750円

歴史人口（民勢）学の研究者は、日本を“Treasure Island”と呼ぶことがある。わが国には江戸時代に作成された「宗門改帳」をはじめとする人口史料が豊富に保存されているために、国外の研究者から羨望の眼差しで眺められているのである。近年は、国外の研究者が「宗門改帳」を史料として著書・論文を公表する機会も急増している<sup>1)</sup>。

1986年1月には IUSSP（国際人口学研究連合）歴史人口学東京セミナーが「歴史における都市化と人口移動」をテーマとして慶応義塾大学で開かれ、国内外の40本もの報告が活発な討論の対象となった。国際会議に先立ち、1984年には歴史人口学研究会が発足した。日本でもようやく、この研究分野の市民権が認められようとしている。

著者は日本における歴史人口学の生みの親であるとともに、生まれて日の浅い歴史人口学を幾多の国際会議・論文を通して主導し続けてきた。「宗門改帳」が国際的な学術用語として定着し、本書で事例とされている美濃国安八郡西条村の名が国外に知られるようになったのも、著者を総帥とする慶応グループの研究活動の成果の一つである。

歴史人口学の成立は、1950年代後半フランスで家族復原法が開発された時点に遡る。家族復原法によって、工業化社会以前の家族の人口学的行動を観察できるようになっただけでなく、識字率など民衆の生活全般に及ぶ情報が教区簿冊から得られるようになった。工業化社会への移行期に生じた民衆生活の変貌過程の解明を目指したアナル学派の社会史、あるいはプロト工業化論の華々しい展開の基礎には、歴史人口学側の地味な蓄積があったのである。国外の研究者が難解な古文書の読解に挑む背景にも、短期間のうちに工業化・都市化社会を築いた日本の近代的経済発展の出発点を江戸時代の社会構造に求め、西欧と日本の移行過程を比較検討する、という壮大

な問題意識がうかがえる。

「宗門改帳」を主な史料として農民生活を復原するという問題意識は、もとより研究機関に在籍している者だけに占有されているわけではない。史料を保存している地元の有志が、家系図を作成したり、先祖の生涯を調査している例も二、三にとどまらない<sup>2)</sup>。このような貴重な研究を個別事例の仇花に終わらせないためにも、歴史人口（民勢）学研究の視座と研究法を記した手引書の必要性が高まっている。

本書はNHKブックスの一冊として軽妙な語り口と大胆な仮説によって、内外の歴史人口学研究者が醸し出している熱気を一般読者に伝え、過去への思考を促す触媒となることに成功している。本書の構成は以下に示される。

第1章 民衆生活史と歴史人口学

第2章 宗門改帳の整理法

第3章 西条村とその周辺

第4章 西条村の人口統計(1)

第5章 西条村の人口統計(2)

第6章 人々の多彩な生涯

第7章 西条村人口史と江戸

本書の主題は江戸時代の西条村で生きた農民の日常生活を具体的に復原することである。前著<sup>3)</sup>で成功を取めた人口史を展開しようとする著者の意図が第1章から看取できる。この点が歴史人口学の研究動向を平易に要約した他の入門書<sup>4)</sup>と異なる特色である。とくに、従来の近世農民史研究はあたかも基礎工事抜き建築であり、「経済的法則にせよ、政治支配にせよ、現実の農民生活がどうであったかを知らなくては、正確に掴むことはできない」という主張には双手を挙げて賛意を表したい。

第2章には研究方法が提示されている。著者が1960年代に導入・改良を加えた家族復原法は、(1)「宗門改帳」を世帯ごとに基礎シート(BDS)に筆写する、(2)BDSから静態人口統計シート、世帯シート、家族復原フォーム、個人行動追跡シートの4表を作成する、(3)各表から人口学的指標を計算する、という順序で史料整理作業が行われる。しかし、この方法をもってしても、「宗門改帳」読解から人口学的指標算出までの作業過程は膨大であり、精神力・体力ともに強腎でなければ1ヶ村の人口統計を作ることすら困難を極める。また、苦勞して「宗門改帳」を筆写しても公刊される可能性が少ないために、研究者が史料を相互利用することは不可能に近

い。たとえ史料が翻刻できたとしても、指標の算出を手作業で行うと計算間違いが多くなる。このような点を改善するために大型計算機の利用が提唱されている。評者が開発中の「宗門改帳」データベースも試行例の一つである。

第4・5章で100冊近い「宗門改帳」から様々な人口学的指標が提示されている点は、民衆生活を知ろうと意欲が深い。西条村の人口統計から強調されているのは、都市の“アリ地獄”効果である。

仮説の論点は以下に要約できる。

- 1) 濃尾地方の農村では高い出生率と低い死亡率が特色であるが、幕末まで総人口は停滞している。
- 2) それは、農村から都市へ主として小作層世帯の生産年齢人口が大量に年季奉公人として移動していることが原因である。
- 3) 直接的には都市での奉公期間中に死亡したり、奉公期間が終了しても都市に永住するなど“アリ地獄”に飲み込まれることによって、間接的には奉公から帰村した者も結婚年齢が遅れ、出産力が低下することによって農村部の人口増加が抑制されていた。
- 4) 農村内部においては、上層世帯では出稼率が低いため、結婚年齢が低く出産数も多くなり分家が進行する。他方、小作層世帯では出稼率が高いため、結婚年齢が高く出産数も少なく絶家が増える。このようにして、上層世帯の分家が小作層世帯の絶家の跡を埋めていた。

“アリ地獄”効果の仮説は、江戸時代の民衆の生活交渉空間を閉鎖的なイメージでとらえていた従来の通説を覆したばかりでなく、家族の階層間移動と地理的移動を結びつけた点で評価が高い。しかし、民衆の人口移動を都市・村落といった一元的な軸だけで説明できないことも事実である。村落間の遠距離移動も相当量に上っていたと推測される。たとえば、京阪神地域に位置する村落では18世紀以来150年にわたって遠隔地からの入婚者・年季奉公人を恒常的に受け入れていた。また、18世紀中期以降人口が停滞していた京・大坂と、人口増加が持続していた江戸の様相を“都市”としてひとまとめにすることはできない。なお、この問題については齊藤修<sup>9)</sup>が仮説を補強している。

本書には“アリ地獄”効果の仮説のほかにも、たとえば、なぜ江戸時代に多量の文書が作成されたの

か、といった重要な問題提起が多い。ただ、農民の日常生活を家族や個人単位で想像するにはなお情報不足の趣がある。世帯構造、家族周期、結婚や相続の形態、名前の付け方など、史料を「宗門改帳」に限定しても把握できる情報はなお数多い。第6章では個人史を叙述する工夫がされてはいるが、たとえば、典型的な家族周期モデルを示すことによって集落単位の人口統計と個人史の間を埋める余地は多分に残されている。さらには、衣食住を中心とする農家経営と家族との関連を示した史料の分析が一例でもあれば、個々の農民生活により肉薄できると思われる。

江戸時代の民衆生活は、現代以上に地方色が豊かであった<sup>6)</sup>。個別集落の民衆生活の地域的特色を全国的展望の中で位置づけ、工業化社会への対応過程の地域的差異を明らかにすることが、歴史地理学の立場から民衆生活を分析する当面の課題と思われる。

歴史人口学は「生まれて間もない学問分野」である。素朴な疑問が引金となって新しい発見があったり、今までの定説が覆ることも多い。本書が歴史人口学を志す若い世代の礎石となることを確信している。

[注]

- 1) たとえば、S. B. ハンレー、K. ヤマムラ(1982) : 『前工業化期日本の経済と人口』 ミネルヴァ書房(速水融、穂本洋哉訳)があげられる。
- 2) たとえば、山田正雄(1980) : 『播州黍田村農民の歴史』太陽出版、などがある。
- 3) 速水 融(1973) : 『近世農村の歴史人口学的研究—信州諏訪地方の宗門改帳分析』東洋経済新報社
- 4) 鬼頭 宏(1983) : 『日本二千年の人口史』PHP研究所
- 5) 齊藤 修(1987) : 『商家の世界・裏店の世界』リプロポート
- 6) たとえば、成松佐恵子(1985) : 『近世東北農村の人びと—奥州安積郡下守屋村—』ミネルヴァ書房、は本書と対比できる。

(川口 洋)